

浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

第 107 回 (2017. 12. 4) の要旨

拝読文(『真宗聖典』56 頁)

唯正道を樂いて余の欣戚なし。もろもろの欲刺を抜きて、もって群生を安くす。功慧殊勝にして尊敬せざることなし。三垢の障りを滅し、もろもろの神通に遊ぶ。因力・縁力・意力・願力・方便の力、常力・善力・定力・慧力・多聞の力、施・戒・忍辱・精進・禪定・智慧の力、正念・正観・もろもろの通・明の力、法のごとくもろもろの衆生を調伏する力、かくのごときらの力、一切具足せり

真宗聖典 56 頁の後から 7 行目「唯正道を樂いて余の欣戚なし」ですが、この正道を樂うということは、仏道ないし菩薩道ということをして正しい道として、その道のみを樂うということです。この楽しむという字を「ねがう」と読んでおります。「欣戚なし」の欣の字も「ねがう」という意味をもっています。「戚」の字は、「いたむ」という字です。心に感ずる悲しみ、つらさというものを何かこの字で表現しているのでしょうか。樂うということは、つまり菩提心に立つということです。菩提というのは、仏陀がもっておられる精神界ですが、仏陀の精神界を自分の精神の目標にするということが菩提心という言葉で言われる関心です。その関心はこの世的な利益を得たいとか、上手くやっ行ってこうとか、損得勘定とか、そういう自己保身の関心ではありません。この命がこの世に与えられたことに対して、何か深い課題を感じ、この世を本当に突破して行くような方向を尋ね当てたいというような要求、それが菩提心という言葉で教えられる大切な方向だと思います。

そして、次に「もろもろの欲刺を抜きて」とあります。欲の刺です。三界の内が一番下が欲界でその上が色界、その上が無色界です。三つの世界を人間の精神界だと仏教は見ていますが、その一番下の欲界を私たちは生きています。仏陀の心からすれば本当に哀れな、衆生は自分が欲界を勝ち残って生きていこうという関心でのみ生きています。これが欲刺という言葉で出ています。欲というのは貪りの欲です。何かこの頃の資本主義社会を動かしているのもほとんど人間の欲だと言っても良いでしょうが、その欲の刺、欲刺を抜くということが、ここで語られている菩薩道、菩薩としてのあり方です。

そして「もって群生を安くす」。我われ人間は一人で生きていたのではない。人の中に生まれて来て、人の中で人として生きていかなければならない。この一人の身であるということと、群生として生きるということが両立するということが大変難しい。独りで生きるということのもっている大切さと、また平等に多数の人たちが一緒に味わうべき課題であるということも同時に成り立つような精神界を仏陀は開かれたと言っても良いわけです。

これは私が聞いた言葉で忘れることが出来ない言葉なのですが、私の師匠であった安田理深先生が、つぶやくようにおっしゃったことがありました。仏教の教えというのは独りでいても寂しくなく、大勢いても少しも騒がしくない。こういう精神界が与えられるのだと。それが実は僧伽という言葉を生んで来るのだと。僧伽はお互い一人ずつ独立しているけれども、共同生活ができ、その中では、争ったり、排除したりということがないのです。

何か群生として生きながら安心して生きられる、そういうことを「群生を安くす」というわけ
です。

「**功慧殊勝にして尊敬せざることなし**」。功慧、これは功德と智慧という意味で、両方の文字
が入っているのでしょうか。功德にはいろいろな意味がありますが、この世的功德ではなくて、
求道の菩提心に立った功德ですから、それは何か菩提心の蓄積が生み出して来た力と言っても良
いようなものを功德という言葉で言うわけでしょう。そして慧というのは、その菩提心がもって
いる判断力とか、感覚力というものを智慧という言葉で押さえるわけです。その功慧が殊勝、殊
更に勝れ尊敬されないということはないのだ、ということです。

「**三垢の障りを滅し、もろもろの神通に遊ぶ**」。三つの垢というのは、貪欲・瞋恚・愚痴とい
う三毒を三垢ともいうわけですね。人間を動かす代表的煩惱は貪欲と瞋恚ですけど、貪欲瞋恚の
根にあるようなものが愚痴です。この仏教語の愚痴は、真理を知らないというような愚かさと言
います。真理と言っても科学的真理ではなくて、仏陀が見出した真実、ダルマ (dharma) です。

そして「**もろもろの神通に遊ぶ**」。本願のところに六神通 (P16~17 本願文 5~10) がありま
したが、神通力といひまして、仏陀が開かれたさとりから出てくる精神的な力、それは超人的な
力として表現されています。天眼、天耳、他心智、宿命通など、仏陀の力が神話化されてきてい
るわけですが、それが大乘仏教に来ると、菩薩の力としても教えられるわけですね。神通に遊ぶ、
ここで遊ぶという言葉が出て来ます。遊戯 (ゆうぎ) と書いて「ゆげ」と発音しますが、菩薩の
遊びというのは、教化することが遊びになるのです。衆生教化ということが遊びの内容になる。
遊ぶといっても、凡夫がこの世で遊ぶ遊びとは違って、菩提心によって衆生と共に生きて、衆生
に仏法の功德を与えていくということが遊びになる。遊戯自在という言葉がありますが、遊ぶこ
とに自在であるということです。この世俗を超えるような、世俗を突き抜けるような智慧が与え
られないと、この菩薩のような自在ということは達成できません。お互いに相手は相手のままに
成っていればそれで良いという、こういうことを成り立たせるようなはたらきをすることが遊戯
ということですね。

しかし、それは我われ凡夫にとっては達成できないという悲しみがある。そこに親鸞聖人は、
それまでのいわゆる仏教の教えというものを、向こうからこちらに来る回向という形で、凡夫は
凡夫で生きていくなかで大悲としていただくということを徹底したわけですね。自分が凡夫でな
くすることは絶対にできない。けれども凡夫である悲しみをもちながら大悲に触れていく。これが
親鸞という人のある意味で新しい仏法のいただき方だと言っても良いのです。

次に不思議な言葉が出て来ます。「**因力・縁力・意力・願力・方便の力、常力・善力・定力・
慧力・多聞の力、施・戒・忍辱・精進・禅定・智慧の力、正念・正観・もろもろの通・明の力、
法のごとくもろもろの衆生を調伏する力、かくのごときらの力、一切具足せり**」。力という言葉
でいろんな要素を取り上げてこられます。このうちの幾つかは、我われがこの世で生きているこ
とを成り立たせる力でもある。我われがこの世を生きる生命力といわれる力、これは因力と言っ
ても良い。因力は、この頃の言葉で言えば生命力でしょう。縁力というのは条件です。仏教は因
縁でものを考えますから、命を支えるあらゆるはたらきが全部縁であるということです。

そして「意力」、意力というのは、意志力と言っても良いのかも知れませんが、我われ自身が
自分で意志して生きるというよりも、我われを他所から動かしてくるような様々な心理条件、心
理的なはたらきの一番中心にあるたまわっている意志と言っても良いでしょう。

「願力」願いの力ということとは、大きくいえば阿弥陀如来を成り立たせる願い、法蔵菩薩とい
う名前で行われている願、大悲の誓願です。これは、十方衆生を平等に救い遂げたいと教えられ
る願ですから、この願が力という意味をもつのです。

そして「方便の力」。真理に触れたブツダ (buddha) はこの真理というものを言葉にすること
はできない、言葉で表すと誤解されると考えたわけですね。しかしこの世を生きている人間とい
う存在に呼びかける為には、言葉によらざるを得ない。その時に、言葉が方便、手立てであるとい

う意味があるのです。ブツダの教えは、方便として言葉になったのです。曇鸞大師が、「法性法身に由って方便法身を生ず。方便法身に由って法性法身を出だす」という言い方をしますが、法性、真理であることそれ自身は色もなく形もない。この世的な形にならないわけです。法性が、形に成らざるを得ないという場合は、方便になるわけです。だから、法性は方便を開くと。これを曇鸞大師は、「法性法身に由って方便法身を生ず」とおっしゃるわけです。

『法華経』がいう真実は真実の言葉でしょう。言葉はもともと方便なのです。もとの意味からすれば、それを何か位を下げて、真実であったものを言葉のレベルで真実だというわけです。

親鸞聖人の、御名号は方便法身である、という場合の方便は、それを通さなければ我われが直接真実に触れることはできない、真実そのものを分かる手立てとして方便というものが開かれるという意味です。

ここで言う方便の力というのは、本当に人を教化していく、人を説得していくための手立てを生み出す力のことです。

そして「常力」、これは常にはたらいている、平生を平生として支えるような力でしょう。

次に「善力」ですが、この善も倫理的な善という意味ではありません。煩惱に対して善という言葉があります。これは唯識論ですが、煩惱ではない心理というものを善とするのです。ですから、安らかであるという心理、騒がしく動いているような心理ではなくて、安定している、安心であるという安、その安という心理作用、平らかであるということも仏教の心理として善という意味をもちます。

真宗の教えでも、親鸞聖人は、現生十種の利益ということをおっしゃいます。我われが生きていることを成り立たせるのは、沢山の縁である。阿弥陀如来の大悲の光に照らされるなら、諸仏護念、冥衆護持など、人間を恐ろしがらせてくるような様々な作用は、実はそれはみなこの命を支えてくれるものだという眼が与えられることを利益として言われているわけです。そういうふうにいただくと、自分で鍛錬して平常心になるなどとしなくても、いつの間にか平常心にしてくれるのです。それは不思議な力だと思います。そういうことが、善力という言葉で言われるような力でしょう。

それから「定力」、これは禅定力という言い方もありますけれど、精神集中によって心が一境に住するということです。何かこの定の力というものが不思議な力をもつ。阿弥陀如来の力も大三昧力の中にあると言われているのですが、そういう阿弥陀如来の力という形で我われが感ずるものも大きな定の力なのです。

その次が「慧力」、これは菩薩がもっている智慧の力です。もちろん仏陀もこの智慧の力ももっています。仏陀がさとりを開かれてもっている智慧というのは、衆生を救済する為に使いますから、常に方便の力、言葉となって教えを伝える力となる。それが慧力というわけです。

その次は、「多聞の力」、多聞の力というのは、仏法の言葉を沢山聞くことによってそれが蓄積された力になる。この仏法の言葉を聞くという智慧は、世間の知恵とは違う面ももっています。言葉を超えた世界からくる言葉が、言葉となって聞こえてきて、それが何か人間に深い智慧を開いてくる。ですから長い間聞いているということは、人間を変えてくるのです。門徒の方でも、長く聞法を続けた方というのは、宗教的要求が動いて教えを聞こうとしますから、その歴史が積み重なると人間を変革するのです。不思議なことです。先ずは顔が変わってきて、考え方も変わって来る。柔軟心、この世を生きているということに対して受けとめる力が出てくるといいますか、何かそういう不思議な力ももっているのです。仏法の言葉は、単なる世俗の言葉でなくて、どこかで世俗を超えるような世界から呼びかけて来る言葉ですから、なかなか聞き取ることは難しいのですが、長い間聞いていることによってもとの精神界からの力はその言葉を通してどこかで伝わってくるということが起こるのです。それを多聞の力という言葉で言っているのだらうと思うのです。

その次は、「施・戒・忍辱・精進・禅定・智慧」これは六波羅蜜。波羅蜜の智慧です。布施と

いうのは作心なく、つまり意識が動くことなく与える。そうすれば布施行になるわけです。

持戒もそうです。戒律を護るということは、人間関係の中に生きているから戒が必要になる。相手が迷惑する、苦しむ、そういう場合は止めておかなければいけないということが戒になるわけです。忍辱も、精進も、禅定もすべて人間関係の中にあって成り立たせようとする努力をすることが力になるということです。そういう行に対する信頼があって、行ずることにより、自分にその功德が残って来るということを信じて行ずるわけです。

親鸞聖人が「南無阿弥陀仏」を大行だと言った場合は、如来の大悲が言葉として与えられますから、その「南無阿弥陀仏」の大悲の行がはたらくところにたすかるのです。こちらから求める必要のない、向こうから与えようとして下さるものがある、念仏するということを信ずるなら、その念仏を称えるところに無上功德が具足すると教えられているわけです。それが行の力なのです。

『無量寿経』では法蔵菩薩がこの六波羅蜜を行じ、その物語の功德が「南無阿弥陀仏」となって我われに来るのだということなのです。

文責：大谷一郎（親鸞仏教センター嘱託研究員）